

2006年度

文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」選定

「アジア理解教育の総合的取組」



アジア言語スピーチコンテスト



ASIA MIX ガムラン演奏



ASIA MIX ベリーダンス



多くの人達との出会いと
交流の中、みなが自分を

アジア言語スピーチコンテスト

「特色ある大学教育支援プログラム」とは・・・

洋子●大東先生。スクールバスのボディに、国際関係学部の「アジア理解教育の総合的取組」が2006年度文部科学省『特色ある大学教育支援プログラム』に選定されました、というラッピングがしてありましたが、あれは何のことでしょうか。

一郎●キャンパスプラザの横の建物の壁にも同じような垂れ幕がかかってましたよ。

大東●そうだね。きみたちにもきちんと説明しておかなくてはいけないね。『特色ある大学教育支援プログラム』というのは、文部科学省が2003年度(平成15年度)から実施しているもので、文系・理系を問わず、さまざまな分野で教育をしている全国の大学から、特色ある優れた実践を選定して、財政支援を行なうとともに、その事例を広く社会に情報提供することで、大学教育を活性化させようという趣旨で始められたんだ。Good Practice(優れた実践)の頭文字をとって「特色 GP」とも呼ばれている。

洋子●それに国際関係学部の教育が選ばれたというわけですね。

大東●そう。国際関係学部は1986年に設置されたんだが、きみたちも知ってのとおり、アジア研究に重点をおいて教育をやってきた。この20年間に取り組んできた教育を、「アジア理解教育の総合的取組」として整理し、文部科学省のプログラムに申請したんだ。

一郎●へえー。これまでやってきた国際関係学部の教育が評価されたわけですね。どれくらいの数の大学が申請したんですか。

大東●2006年度は、全国の大学・短期大学から331件の取組が申請を行ない、国際関係学部の取組を含めて、48件が採択になった。採択率は14.5%だから、けっこう狭き門なんだ。

洋子●何が選ばれた理由なんでしょう。

大東●選定を行なう「特色ある大学教育支援プログラム実施委員会」が、審査結果を公表しているんだが、それを引用すれば、こうなっている。

選定理由

《本取組は、1986年から開始されているだけに体系的でよく練られたアジア重視型プログラムであるという印象を与えます。大学の建学の精神が教育プログラムのなかに具体化されていることも評価されます。また、アジア地域言語教育、地域研究カリキュラム、現地体験型学習、学生による企画・参加・実行型の活動という4つの活動が結びつき、アジア理解に焦点を絞った「総合的取組」と表現するにふさわしい内容を持っています。》



大東教授

洋子：国際関係学科1年 一郎：国際文化学科1年

一郎●「大学の建学の精神が教育プログラムのなかに具体化され」とありますが、これはどういうことですか。

大東●本学の創立は1923年、今から80年以上も前のことだが、そのとき掲げた建学の精神が「東西文化の融合」というものだった。

一郎●東洋文化と西洋文化の良いところをとり入れ、両者の架け橋になる、といったことでしょうか。

大東●そうだね。創立80周年記念誌には、《東洋固有の文化を原点に、西洋文化を探求しながら、東西文化の融合をはかり、新たな文化の創造を目指した》と書かれている。いずれにしても、大東文化大学は建学のときから、アジア、東洋を重視してきた。その大学の5番目の学部として設置された国際関係学部は、建学の精神をより具体化させて、《中国・朝鮮半島から中東・地中海世界に広がる世界を対象として、言語の習得を基礎に、それぞれの地域に根ざしたアジア理解教育を推し進め、アジアへの豊かな想像力と理解力をもって日本とアジアの人びとの相互理解と友好の促進に貢献しうる人材を育成する》ことを教育の目標にしてきたんだ。

洋子●なんだか難しそうですが、その目標を達成するために進めてきたのが、「アジア理解教育の総合的取組」というわけですね。もう少し具体的に取組の中身を教えてください。

「アジア理解教育の総合的取組」の4つの柱

大東●選定理由でも述べられているように、「アジア理解教育の総合的取組」は4本の大きな柱からなっている。

一郎●「アジア地域言語教育」「地域研究カリキュラム」「現地体験型学習」「学生による企画・参加・実行型の活動」の4つですね。

大東●そのとおり。この4つは、1986年に学部ができたときから、アジアを重視する国際関係学部の教育の柱になってきたものだ。このうちのどれを欠いてもうまく行かないだろう。国際関係学部という建物を支える4本柱というわけだね。

洋子●「アジア地域言語教育」とは1、2年の必修科目になっている地域言語のことですね。わたしはベトナム語を選択していますが。

一郎●僕はペルシア語をとってます。



板橋キャンパス



東松山キャンパス

アジア地域言語教育

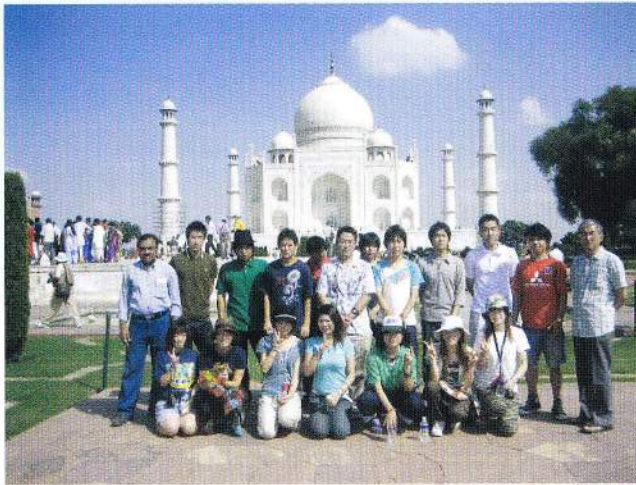
大東●そう。必修科目になっているのは、アジアを研究するのに、アジア地域言語はコミュニケーションの道具として欠かせないからだ。

一郎●現代世界では英語が共通語みたいになってますが、たとえば、中国に行けば中国語で、タイではタイ語で、エジプトではアラビア語で話したほうが、相手の反応は違うんでしょうね。

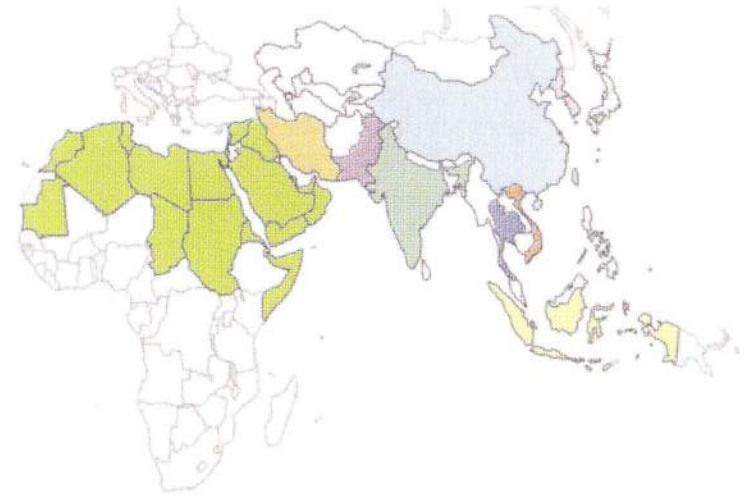
大東●そのとおり。アジアの人びとと心のコミュニケーションをはかるには、アジアのことは不可欠だ。この学部では、中国語、コリア語、ベトナム語、インドネシア語、タイ語、ヒンディー語、ウルドゥー語、ペルシア語、アラビア語の9言語から1言語を選択必修にしているが、それはアジア言語を習得して、心と心の通いあうコミュニケーションの道具を手に入れてほしいからだ。また、言語はたんにコミュニケーションの道具というだけでなく、文化そのものだから、アジアの社会や歴史を学ぶにしても、言語の習得がすべての基礎になる。

洋子●アジアの言語は、中国語などを別にして、まだまだ学ぶ人が少ないから、希少価値もあるでしょうね。ベトナム語ができる日本人はそう多くないでしょう。一郎君が学んでいるペルシア語はもっと少ないかも。

一郎●英語とアジア言語を身につければ鬼に金棒ですね。



現地研修2006：インド(世界遺産タージ・マハルにて)



●中国語 ●コリア語 ●インドネシア語
●タイ語 ●ベトナム語 ●ヒンディー語等
●ウルドゥー語 ●ペルシア語 ●アラビア語

大東●そうだね。もちろん、英語もしっかり勉強してほしい。英語についても、きみたちの期待にこたえられるようなカリキュラムが組んであるはずだ。

洋子●わたしたちはまだ1年ですが、アジア地域言語教育の到達目標はどういうものですか。

大東●洋子さんであれば、ベトナム語を不自由なく使いこなすようになることが最終目標だが、段階的な目標を設定したほうがいいだろう。たとえば、2年生になったら現地研修に行くことになるだろうが、研修先のハノイ国家大学の学生とベトナム語で意思疎通ができるような語彙力と文法を習得する。さらに、4年生になって卒業論文を書くときには、ベトナム語の資料が使えるようにする、というようにね。

一郎●単語マラソンというのは、語彙力をつけるためにやってるものですね。

大東●そう。陸上競技のマラソンは、42.195kmを走り抜けるものだが、単語マラソンは、身につけるべき語彙数をゴールとして設定し、そこへの到達度を競うものだ。語学力の基礎はなんといっても語彙力だからね。各言語の単語マラソンの優勝者は、スピーチコンテストのときに表彰することになっているんだ。

地域研究カリキュラム

洋子●地域言語の習得がアジア理解の基礎になるというのはわかりました。では、4本の柱の2つめ、「地域研究カリキュラム」について説明してください。

大東●洋子さんは国際関係学科でベトナム語を、一郎君は国際文化学科でペルシア語を選択している。学科と地域言語によって、履修する地域研究科目が決まってくる、というのはわかるね。

一郎●はい。僕の場合、2年から学ぶ地域研究科目としては、「西アジア史」「西アジアのことばと文化」「西アジア芸術研究」があり、「西アジアの政治と国際関係」「中東・地中海世界の風土と経済」「西アジアの社会と暮らし」からも選択履修できる。

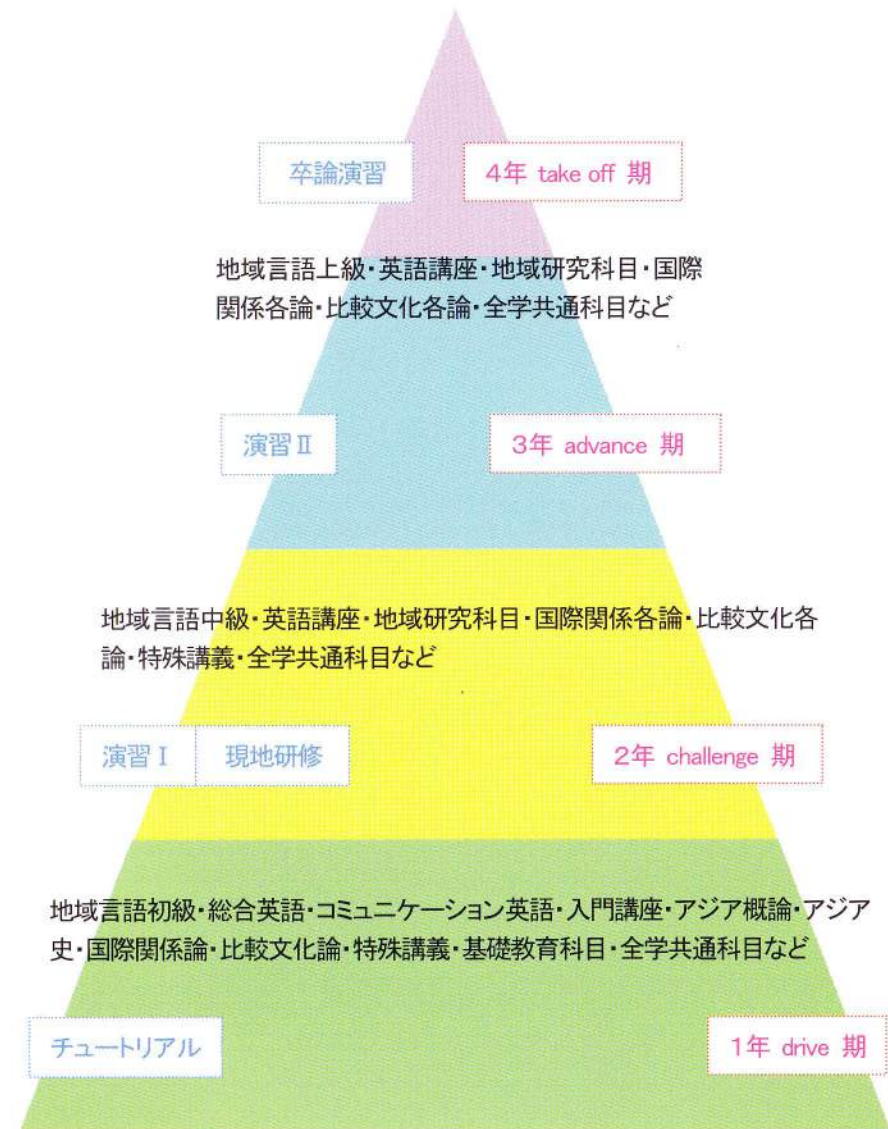
洋子●わたしは「東南アジアの政治と国際関係」「グローバル化の中の東南アジア経済」「ヒトとモノから見た東南アジア社会」といった科目を履修する。ほかに、国際文化学科対応の「東南アジア近現代史」「東南アジアの生活と文化」「東南アジアの芸能」も選択できる。

大東●そうだね。いまあげてくれたのが地域研究のコアになる科目群だが、中国と韓国を中心とする東アジア、インドネシア、タイ、ベトナムの東南アジア、インドとパキスタンの南アジア、イランと中東諸国を中心とする西アジアの4地域について、それぞれの地域性と多様性をふまえたカリキュラムが組んである。この地域研究カリキュラムによって、アジアの具体的な姿に触れ、アジア理解を進めていってほしいんだ。

一郎●1年用の「入門講座」は？

大東●きみたちはアジアについて学ぶといっても、具体的なイメージがなかなか浮かんでこないだろう。入門講座は、アジアのさまざまなトピックを材料にして、アジアへの興味を育ててもらうために開いている授業だ。「ああ、アジアってこんなにおもしろい世界なんだ」と思ってもらえれば、この講座の目的は果たされたと言っていい。右の概念図は、1年から4年まで、段階的にどのようなカリキュラムが組まれているかを示したものだ。

一郎●「1年 drive 期」とか「2年 challenge 期」とかいうのはどんな意味ですか。



カリキュラム概念図

大東●「drive 期」はアジア研究への導入と言ったらよいだろうか、アジアへの関心、興味、アジアを学んでみようという意欲を育てる時期、ということだ。学年が上がるにつれて、アジア研究のさまざまなテーマに触れてチャレンジする「challenge 期」、理解を深める「advance 期」、そして最後に、卒業論文で研究をまとめる「take off 期」、と段階的に進んでいく。“take off”とは「離陸」の意味だから、国際関係学部で学んだことをもって社会に巣立っていく、ということでもある。

洋子●地域言語でも英語でも、地域研究カリキュラムや各論でも、段階的で無理のないカリキュラムが組まれていて、それに沿って学習していく、ということですね。

大東●そうだね。ただ、このことはぜひとも強調しておきたいのだが、どんなに良いカリキュラムが生まれ、先生たちがどんなに熱心に授業をしても、最終的に勉強が身につくかどうかはきみたち次第だ。わたしたちは、いろいろ工夫をこらして授業をやっているつもりだが、やはりみずから学ぶという意志がなければ、カリキュラムや授業をどんなに改善しても、絵に描いたモチだからね。きみたちは1年生だから、特殊講義「アジアの身体とパフォーマンス」で体を動かすことから始めてもいい、何はともあれ、アジアってこんなにも面白いんだ、と知ってほしいね。

一郎●わかりました。3つめの「現地体験型学習」というのは？



特殊講義「アジアの身体とパフォーマンス」授業風景

現地体験型学習

大東●2年になったら「現地研修」というプログラムがあるのは知っているね？

一郎●はい。アジア各国の大学に行って研修を受けるというやつですね。

大東●そうだ。大東文化大学は世界18の国・地域の51大学と交流協定を結んでいるが(2006年4月現在)、国際関係学部は中国の上海師範大学、韓国の高麗大学、タイのチュラーロンコーン大学、エジプトのアレキサンドリア大学といった、それぞれの国を代表する大学と協定を結び、夏から秋にかけて、教員が引率して3週間から4週間、海外研修を実施している。それを「現地研修」と呼んでいるわけだ。

洋子●わたしはベトナム語だから、ハノイ国家大学ですね。

一郎●僕はイランのシーラーズ大学だ。

大東●この現地研修の目的は、まずは地域言語の学習の成果をためすことで、自分の語学力を確認し、そうやって学習意欲をさらに高めることだ。「わたしのベトナム語って、けっこう通じるわね」とか、「いやー、俺のペルシア語、もうちょっとがんばらなきゃな」とかね。それから、協定校での受講とさまざまな交流、研修旅行などを通じて理解を深め、今後のアジア研究につなげることも大切だ。

一郎●研修先では、どういところに泊まるんですか。

大東●中国、韓国、パキスタン、イランは大学の学生寮やゲストハウス。タイ、ベトナム、インド、エジプトはホテル。インドネシアでは、インドネシア人家庭へのホームステイだ。ホームステイでは、ホストファミリーから家族の一員として受け入れられ、学生たちも「おとうさん」「おかあさん」「おにいさん」「おねえさん」と呼んで(もちろんインドネシア語で)、すっかり溶け込んでいるみたいだ。帰国後、家族の結婚式に招かれたりして、またインドネシアに行く学生もいるようだね。

洋子●なんだか楽しそうですね。このプログラムでは、協定校での研修のほかに、事前研修と事後研修も行なわれるわけですね。訪問先の歴史や社会、文化、日常生活などについて十分な予備学習が必要だし、研修成果をその後に生かすことが大事ですからね。



現地研修2006：インドネシア(結婚式に招かれて)

アジア諸国の提携校と現地研修参加者数 1,918名(1996~2005年)



(注) 1996年~2005年度までの参加者数。
1996年以前は必修科目。2005年は参加予定数。
SARS・その他の影響により2003年の中国・インドネシアは中止。

大東●そう。事後研修では、研修レポートの作成や、語学研修の成果を生かして、「アジア言語スピーチコンテスト」に出場することも、課題になるだろうね。いずれにしても、現地研修は通年科目で、海外研修に行ったらそれで終わりというわけじゃない。しっかりした目的意識をもって参加することが大切だ。

一郎●この現地研修にはこれまで、どれくらいの学生が参加してるんですか。

大東●国際関係学部ができてからの延べ人数では、3,259名の学生が参加しているんだ。これだけの数の学生が、事故もなく研修を終えたというのは、考えてみればたいへんなことで、わたしたちの誇りでもある。研修に参加した学生は、語学力でも、アジア理解の目的意識や学習意欲でも、大きな変化が見られ、多くの学生にとって、アジアへの関わりの大きなターニングポイントになっている。

一郎●留学制度もありますね。

大東●海外留学は学部ができたときから行なわれてきたんだが、積極的に奨励するために、2000年度のカリキュラム改革で、留学を制度化した。つまり、留学講座をカリキュラムに組み込み、留学先の大学でとった単位を、短期(半年)で16単位、長期(1年)で30単位をそれぞれ上限として、卒業単位に振り替えることによって、4年間で卒業できるようにしたんだ。それまでは、1年留学すると、卒業に5年かかっていたからね。右のグラフから、2000年以降、留学する学生数が大幅に増えていることがわかるだろう。

洋子●留学は、現地研修の次のステップというわけですね。わたしも留学してみたいな。ベトナム留学なんて、なかなかできないことでしょうから。

大東●ぜひ、そうしてほしいね。留学は大きな財産になる。語学力の向上を含めた勉強面でもそうだが、いろんな意味で得がたい経験になるからね。

学生による企画・参加・実行型の活動

一郎●4つめの「学生による企画・参加・実行型の活動」というのは、6月にやった ASIA MIX みたいな活動ですか？ 僕もイラン料理班で参加しましたが。

洋子●わたしもベトナム料理をつくりました。

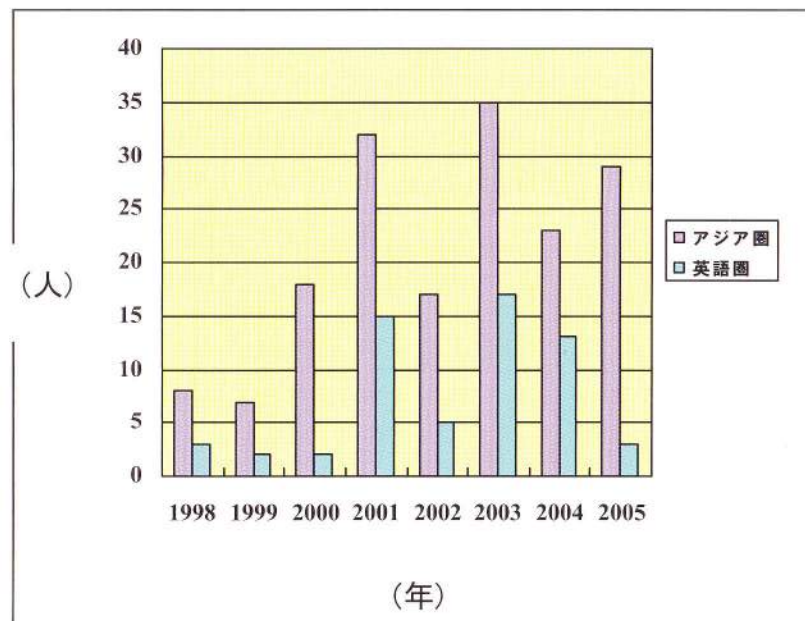
大東●ASIA MIX は、学部ができてまもなく始まったものだから、国際関係学部でもっとも伝統あるイベントと言ってよいだろう。こうした活動の中心になっているのが、**地域研究学会**だ。「学会」というとなんだか硬い感じがするが、教室で先生の講義を聴くだけでなく、もっと外に出て、体を動かし、積極的に、主体的にアジアに関わってほしい、という趣旨でつくられたものなんだ。

一郎●ASIA MIX のパンフに、《**五感を通じてアジアをヴァーチャルに体験する**》とありましたが、それはいま先生がおっしゃったようなことですね。

大東●そう。理屈ばかりで体が動かない、というのじゃなくてね。以前、**アジア言語スピーチコンテスト**のポスターにあった《**書を捨て舞台へ**》というコピーも、同じことなんじゃないかな。

洋子●その活動の大きな柱になっているのが、ASIA MIX と、アジア言語スピーチコンテストというわけですね。ASIA MIX、通称「アジミ」は、わたしもスタッフとして参加したので、だいたいのはわかります。毎年、6月の上旬に開かれて、アジア9カ国の料理を提供する料理祭がその中心ですね。

海外留学者数の推移(1998～2005年度)



ASIA MIX アジア料理祭

一郎●料理祭のほかに、今年は、ガムラン演奏やインドネシア・ジャワの仮面舞踊、ベリーダンスの実演、映画祭もあった。去年は、ムエタイの実演があったみたいで。

大東●そうだね。この活動の意義は、企画から実行まで、すべて学生の手で行なわれるということだ。たとえば、ASIA MIX の料理祭は、東松山キャンパス周辺の地域住民にも開かれた行事だが、「食」というもっとも身近な文化を通じてアジアに触れ、食材や香辛料などを通してアジアを実感する。また、レシピの作成・買出し・調理・模擬店づくりなどの作業を共同で行うことで、アジアという共通の場を軸にした一体感が生まれる。それは良き伝統となつて、上級生から下級生へ受け継がれる。とくに新入生のアジアへの関わりをうながすという意味で、わたしたちからすると、重要な導入教育の役目も果たしているんだ。

洋子●スピーチコンテストは、いつから始まったんですか？

大東●1998年から毎年秋に開かれ、今では「スピコン」の愛称で親しまれている。この活動も、企画から実行まで、学生主体で行なわれ、教員はアドバイザーの立場で参加する。



第3回ポスター 2000年

一郎●今年スピコンに出る先輩の話では、けっこう準備がたいへんみたいですよ。

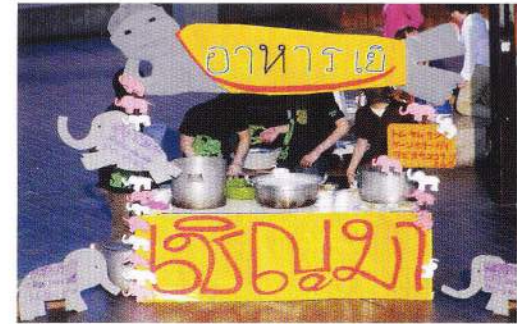
大東●でも、貴重な経験になる。300人をこす聴衆の前で、自分の思いをアジア言語で話すなんて、そうそうあることじゃないからね。

洋子●出場者は、どんな準備をするんですか？

大東●おおまかに言うと、テーマを決める → 原稿をつくる → 先生に添削してもらう → 準完成稿をつくる → 暗誦と練習をする → ネイティブの先生に発音指導を受ける → 最終稿を完成させる → 舞台上で着る衣装を選ぶ → リハーサルをする、といった過程をへて本番に臨む。たいへんと言えたいへんだが、60周年記念講堂で、おおぜいの聴衆の前でスピーチするのは、けっこう快感を覚えるものらしい。

洋子●先生からご覧になって、出場者のレベルは上がっていますか？

大東●回を重ねるごとに上がっていると思うね。最初のころは、



ASIA MIX アジア料理祭(タイ料理)



ASIA MIX ムエタイ実演



アジア言語スピーチコンテスト

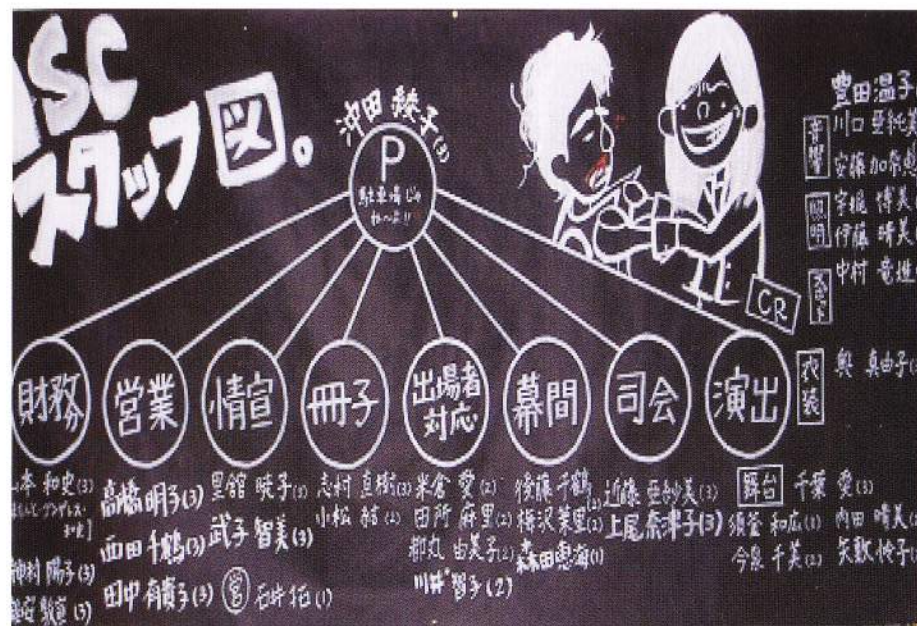
舞台上でスピーチ内容を忘れて、終了の合図があるまでじっと立ち尽くしていた出場者もいたからね。でも、その学生は翌年も出場して、堂々たるスピーチをした。今ふうと言うとリベンジというやつだ。ただ、スピーチがうまいにこしたことはないが、自分の心に感じることを、訴えたいことを、アジア言語でスピーチしてみたいという意欲こそ、わたしは評価したいね。

洋子●スピコンは、出場者がスポットライトを浴びますが、スタッフとして準備する人たちの苦勞はたいへんなものでしょうね。

一郎●出場者を募集したり、宣伝をしたり、パンフをつくったり、協賛してくれる会社をまわったり、趣向をこらした舞台をつくったり……。

大東●そう。スピコンでも ASIA MIX でも、彼らの活動には本当に頭が下がるね。そういう学生たちのがんばりがあってはじめて、国際関係学部の行事として定着してきたんだ。「学生による企画・参加・実行型の活動」は、国際関係学部にとって欠かすことのできない大きな柱だ。

一郎●学生の自主的な活動がさかんな大学は、活気がありますね。



第6回 スピーチコンテスト組織図



第7回 スピーチコンテスト学生スタッフ

大東●アジアの9言語によるスピーチコンテストをやっている大学は、わたしの知る限り、ほかにはないはずだ。国際関係学部では毎年、卒業生にアンケート調査をやっているのだが、ASIA MIX やスピーチコンテストにスタッフや出場者、また観客として参加したことがあると回答する学生が、75%以上いる。これは非常にうれしいことだね。なにも教室で講義を受けるだけが大学じゃない。ぜひとも、こういう活動に参加して、いきいきとした学生生活を送ってほしいね。以上が「アジア理解教育の総合的取組」の4つの柱についての説明だが、理解できただろうか。

洋子●よくわかりました。先生、質問があります。国際関係学部ができて20年ということですが、卒業生はどんなところで働いているんでしょうか？

アジアに関わる卒業生

大東●国際関係学部から社会に巣立っていった卒業生は、20年間でおおよそ4,000人になるが、それこそいろんな分野で働いている。もちろん、一般の企業で働いている人がいっぱい多いんだが、ここ数年、大学時代に教職免許をとって、教壇に立っている卒業生も

出てきているね。

一郎●アジアに関わる仕事をしている卒業生もいますか？

大東●もちろん。いかにも国際関係学部出身らしく、アジアを舞台に活動している先輩たちはたくさんいる。たとえば、パキスタン、アフガニスタンに関わるNGO活動をしている人や、ベトナムで「ストリート・チルドレン」の支援活動に携わっている女性。あるいは、日本語教師、アジア言語教師、留学生会館のアドバイザー、アジア専門の旅行会社で働く人、アジアの民芸品の輸入販売をやっている人、アジアを活動舞台とするプロの写真家など、多士済々だ。タイの首都バンコクやインドネシアのジャカルタで、タイ語、インドネシア語を駆使して働いている卒業生からは、メールで近況報告がよく届く。それから、本学の大学院アジア地域研究科に進学して、さらにアジア研究を続けようという人もいる。

一郎●東ティモールで国連のボランティア活動をしたという人の話も聞きましたが。

大東●そう、女性でね。96年に卒業したHさんは、これも女性なんだが、国際関係学部でインドネシア語を学んで、はじめは化学薬品メーカーの国際事業本部でインドネシアを担当した。その後、インドネシアの国立銀行の外国為替部で働き、さらに海事労務コンサルタント会社に転職した。



一郎●海事労務コンサルタントって？

大東●日本籍の船に外国人船員を斡旋する仕事らしい。そこでHさんは、アジア系外国人船員が安い賃金で働かされ、しばしば人権侵害に泣かされるのをまのあたりにして、疑問を抱き、法整備の必要性を痛感したみたいだね。このためHさんは一念発起して、弁護士をめざし、今はある法科大学院で猛勉強中だ。「在留外国人のために法的なサポートをする人権弁護士」になることが目標らしい。ぜひとも成功してほしいね。

洋子●頼もしい先輩ですね。そういう話を聞くと、ますます目標をもって大学生活を送らなきゃと思いますね。

大東●この学部で学んだことは、教室内で学んだこと、課外活動で得たことを問わず、卒業してどんな職業に就くにせよ、きっと役に立つはずだ。今回、わたしたちの20年間の教育が、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に選定されたわけだが、「アジア理解教育」が選ばれたのは初めてのことだ。先生たちはみな、それぞれの分野ですぐれた研究者であり、その研究の蓄積をふまえて教育に全力投球している。きみたちは誇りと自信をもって勉強してほしいね。

一郎●わかりました。

大東●これから日本とアジア諸国との関係はますます緊密になり、きみたちが国際関係学部で学んだことが、ますます活かされる場面が多くなるだろう。充実した、悔いのない大学生活を送れるよう心から願っている。

洋子●いろいろお話をありがとうございました。（了）



総合物流会社のジャカルタ支社で働く有光 剛さん(2003年卒、左から3人目)